

2005年8月3日

ダイビル株式会社
代表取締役社長 広瀬忠邦殿
関西電力株式会社
代表取締役社長 森 詳介殿
関電不動産株式会社
代表取締役社長 畠中俊尚殿

社団法人 日本建築学会
会 長 村上 周三

ダイビル（旧大阪ビルディング）の保存に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、御社におかれまして1997年に計画され進められています「中之島3丁目における共同開発」に際して、本建築の解体撤去の計画である由、拝聴しております。

本会では以前より我国近代建築の調査研究を行い、その成果を『日本近代建築総覧』にまとめ、1980年に刊行しております。そのなかで本建築は価値高いものとして記されておりますこと、既にご承知のことと存じます。

ダイビルは渡辺建築事務所の設計により1925（大正14）年に建築されたもので、別紙「見解」に記しますとおり、大正期の大阪さらには我国のオフィスビルを代表する歴史的建物であり、近代建築史上極めて価値高いものであります。また中之島西部、堂島川に面して建つ長大にして風格ある建築は、商都大阪の象徴的な建物として竣工以来広く社会に知られてきたものであり、その歴史的景観的価値も高く、かけがえ無き建築であります。

この文化的資産ともいえる建築を保存し活用を図るための方途を積極的にご検討頂き、現下で進められている大規模な地域整備を一層意義深いものとして実現されますようお願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存に関して、技術的支援などできうる限り協力させていただく所存であることを申し添えます。

今後とも、この優れた由緒ある建造物と環境の保全に、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

敬具

ダイビル（旧大阪ビルディング）についての見解

社団法人日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 吉田 綱市

・建物の概要

大阪市北区中之島3 6に所在する本建築は1924（大正13）年4月に起工し、1925（大正14）年9月に竣工している。鉄筋コンクリート造地上8階建て地階を有する建築で、当初の建築面積は約1.179坪、述べ床面積は10.133坪を有する。設計は渡辺建築事務所（渡辺節）、耐震耐火を図る構造設計は内藤多仲、施工は大林組による。

外部1階正面は彫刻を施した龍山石による列柱、その上部壁面を化粧煉瓦（タペストリブリック）、軒部をテラコッタで仕上げられている。オフィスビル建築であり、当初多数の有力企業、金融機関、その他テナントが入り、8階には倶楽部室等が設けられていた。

1938（昭和13）年には新館建設により、東の接続部が改変され、近年正面道路の嵩上げにより、玄関周りが一部改修されている。また内部において貸し室部、旧倶楽部室等の改修もなされているものの、全体として良好に維持活用されている。

・渡辺建築事務所の作品としての価値

渡辺建築事務所は、1908（明治41）年東京帝国大学工科大学建築学科を卒業した渡辺節（1884～1967）によって1916（大正5）年大阪に開設されている。以来大阪を中心に銀行、事務所ビル、住宅など都市の建築を広範に手掛け重要文化財に指定されている日本綿業会館1931（昭和6）年、登録文化財の旧自泉会館など多くの名建築を残して、我国近代の代表的建築事務所の一つとされている。

ダイビル（旧大阪ビルディング）は当時関西経済を先導した大阪商船株式会社、宇治川電気株式会社、日本電力株式会社等が拠点としたオフィスビルであり、建築意匠のみならず当時最高水準の耐震耐火構造、そして先進的諸設備が導入されるなど渡辺建築事務所の総力が投じられた建築であった。

渡辺節は1932（昭和7）年に初期の代表的作品を編んだ『渡辺節作品集』（波紋社）を発刊しており、本建築の記録が代表作の一つとして収録されている。

・デザイン上の価値

設計者は竣工時の工事概要のなかで「内外の装飾は通じて簡素を旨とせしと雖も其の要部に於ては放胆なる意匠と自由なる彫塑を以って豊ならしめたり」と記されている。実際、壁面全体に

ほぼ均一に矩形窓が配置され頂部のコーニスも簡潔であり、合理主義的デザインを標榜したものと見える。一方1階玄関上部には大国貞蔵作の彫像装飾を冠したロマネスク風の半円アーチをおき、その左右5スパンに全面に浮き彫り装飾を付した付け柱（ピラスター）、化粧梁を配するなど華麗な意匠を備えている。また内部業務スペースにおいては採光通風のための光庭を活用し堅実な事務所空間としているのに対し、玄関ホールを2層吹き抜けとし装飾性豊かな空間としている。

つまり本建築のデザイン的特色は、簡潔にして合理的表現と歴史様式的意匠による華やかさをバランス良く配置されたところにあり、建築の有する格式と発展性を示す表現として高く評価されたものである。こうしたデザイン的特色は、所内で設計担当者であった村野藤吾の苦心した表現であったことも伝えられているところである。また装飾的部位は勿論、外壁のタイルと目される化粧煉瓦、漆喰装飾、床のクリンカータイル、テラゾー仕上げなど、それぞれに吟味された材と職手の高い技術による深みある表現がなされ、その質的高さにも注視すべきものがある。

総じて近代建築史のなかで、本建築は歴史様式による建築が近代的表現を獲得してゆく過程のなかで、大正期（1920年代頃）におけるオフィスビル建築の特色と傑出した魅力を備えたものであり、今日において類例は少なく希少価値の高いものである。

・景観上の価値

以上のように、本建築は建築史上の作品としての価値、意匠上の価値をもつことに加えて、大阪の中心部中之島西部の景観にとっても大きな価値を有している。

堂島川に映える本建築の雄姿は竣工時以来、商業経済都市大阪を象徴する歴史的なオフィスビルであり、その景観は広く市民に親しまれてきたものである。この建築につづく時期に堂島川の対岸には大阪商工会議所（設計片岡建築事務所、1923（大正12）年）、東側には新大阪ホテル（設計長谷部竹腰建築事務所、1935（昭和10）年）が建てられ、西には大阪大学医学部の建築群が残され、特色ある都市景観をなしていたが、近年これら由緒ある建築が次々と失われてきた現状がある。そうしたなかで、歴史ある本建築の価値は中之島西部の景観上ますます重要なものとなっている。



ダイビル(旧大阪ビルディング)